

土のうを使った道直しの様子を見学して

京都大学医学部保健学科看護学専攻 4回生 道藪千裕

9月29日、ケニアのニャンダルワで土のうを使った道直しの様子を見学させていただきました。現場に着いてまず驚いたのは、村人たちが自主的に作業をしていることでした。木村教授やカウンターパートが指示を出して仕方なく行っているのではなく、村人たちが和気藹々と作業をしていたのです。

私は現地に行くまで、土のうの作業はそれ単体で終わりである、とっていました。土のうで道直しをすることがゴールであると勘違いしていたのです。しかし、木村教授はじめCOREの方たちから、土のうを使った道直しは、それを通じて村人たちがコミュニティを作り、協力し合って自分たち自身で生活を豊かにすることが目的であると教えていただきました。土のうを使った道直しは、目的ではなく手段であるとやっと気付いたのです。この説明を聞き、住人達のコミュニティ作りの援助は、日本の保健師の活動とつながる部分があると感じました。

日本の保健師の活動の一つにコミュニティ作りがあります。例えば、担当地域での幼児の虐待の原因の一つに、核家族化が進み、母親が育児相談を誰にも出来ずに強い孤独を感じ、その結果子供に虐待をしてしまう、という問題があるとします。問題解決のために、保健師は新生児を持つ母親のグループを作り、育児の相談が出来ない母親同士がお互いに悩みを打ち明ける場を提供し、虐待の軽減につなげるようサポートする、という取り組みがあります。

現在でこそ核家族化が進み、住民同士でのつながりが希薄になってはいますが、日本は水田の用水路を造るために農民同士でのつながりは必要不可欠でした。その為、「暮らしを豊かにするために住民同士で協力し合い、自分たちの力で生活を良くする」という意識は、当たり前なことじゃないかと感じてしまいます。しかしこれも日本の文化であり、ケニアの農民にこの意識を提供することも、国際技術であることを教えていただきました。目に見える技術や知識の普及だけが国際技術ではないんだ、と感じました。「木村教授の講義を聞けばわかることじゃないか」と言われてしまいましたが、私は実際現地に行き、作業の様子や雰囲気、住民たちの話を聞いて、ケニアの人々がどれだけこの活動に感謝をしているか肌で感じ、ようやくこの活動の本当の意味を理解することが出来ました。さらに自分が当たり前と思っていることも「日本の文化」であることが分かりました。

今回のケニア滞在を通して、見るもの聞くものすべて勉強になりましたが、「人とのつながり」が大切であり、何の活動をするにも原点であることを改めて思いました。この学びをずっと忘れずにいようと思います。

最後に、木村教授、喜田さん、福林さんはじめ、ケニアで出会えた方々、大変お世話になりました。本当にありがとうございました。